視察用

様式(細則 5-2)

平成 29 年９月２５日

浜田市議会議長
西　田　清　久　様

議員名　　西田　清久　㊞

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

１．期　　間　　平成 29 年 8 月 22 日（火）～平成 29 年 8 月 24 日（木）

２．視察先および研修テーマ

(1) 場所　　宮崎県日南市　子育て支援センター
　内容　　日南市子育て支援センター「ことこと」の取組について

(2) 場所　　宮崎県高千穂町　高千穂町役場および秋元集落
　内容　　世界農業遺産、伝統芸能の継承の取組について
　　地域資源を活かした取組について（秋元集落）

３．参加者　　飛野弘二、上野茂、串崎利行、平石誠、西田清久

４．調査経費　　１５８，４９５円÷５人＝３１，６９９円

内訳　旅費　83,695 円　宿泊費(体験料含む)　74,800 円

浜田市議会 受付 29.9.25

5．調査研究活動の概要

① 日南市　子育て支援センター「ことこと」の取組について
平成29年8月22日(火)　15：00～17：00
こども課長：黒岩保雄氏　　子育て支援センター所長：藤井真由美氏

(内容)

(1)施設整備の背景

・中心市街地活性化事業（平成24年11月から平成28年度末）の一環で整備。
・計画策定段階での市民の意見、要望などは次の通り。
　○ 市民アンケートでは、必要な施設の最多は大型商業施設21.8%、子育て支援施設も14.0%。
　○ 子育て世代のアンケートでは、遊具のある屋根付屋外スペースが第1位17.5%、子育て支援センター13.3%、地域住民も一時預かり機能充実、子育て環境充実を希望。
・東京おもちゃ美術館と「ウッドスタート」共同宣言（平成27年1月）
　○ 市内の3ヶ月児全てに「うごくぞー」（象の形をした木の遊具）を贈呈
　○ 市内小学1年生に「日南キューブ」（飫肥杉製の積み木）を贈呈
　○ 東京おもちゃ美術館の多田館長の日南市での講演、木育ひろばを紹介

(2)施設の概要

・子育て支援センターは民間施設の一部を賃貸している。
　日南まちづくり㈱が所有する「Ittenほりかわビル」にテナントとし入居
・「ことこと」の整備費および運営費
　○ 整備年度　　平成27年度（設計）、28年度（工事）
　○ 経　　費　　160,070千円
　　設計、管理費　　18,201千円
　　工事費　　141,869千円
　○ 財源内訳　国の交付金　71,200千円（社会資本整備総合交付金）
　　起債　　79,900千円（児童福祉施設整備事業債）
　　一般財源　　8,970千円
　○ 運営費　　17,213千円（平成29年度当初予算ベース）
・施設面積、駐車台数
　○ 施設面積　　564.30㎡（171坪）
　○ 駐車台数　　一般利用者スペース約60台（立体駐車場）利用者2h無料
・家賃等
　○ 家　賃　　1,080,000円(税込)/月
　○ 共益費　　184,700円(税込)/月（ことこと1ヶ所分）
　○ 駐車場　　立体駐車場利用者2時間まで無料の発券1枚につき10円を負担。＊立体駐車場運営に対する補助金100万円/年を市が負担。
・施設の特徴
　○ 当初は、子どもに人気のあるキャラクターを活かしたミニ遊園地を想定
　○ 東京おもちゃ美術館館長（多田千尋氏）の講演、飫肥杉（おびすぎ）の産地、

ウッドスタート宣言などにより木育を特化

○　購入したおもちゃ以外は、内装材を含め全て飫肥杉

○　設計、管理は東京おもちゃ美術館の木育ひろばを設計した㈱パワープレイス（東京）

○　スギコダマなどの製作に市民がボランティアで協力

○　木育ひろばとしての規模は日本一

○　工事はすべて市内業者、おもちゃの購入先はすべてグッドトイ委員会

(3)職員体制

・正規、嘱託職員、資格者

○　正規保育士　4名（所長1名、主任保育士2名、保育士1名）

○　嘱託保育士　2名

○　嘱託看護士　1名

○　嘱託子育て支援員　1名

○　再任用保育士　1名

＊　職員の代休、振休等もあり常時7～8人で対応。勤務は時差出勤のシフト制

(4)施設の機能

・遊び場と交流の場の提供

・一時預かりの実施

開設日9時～21時まで対応。有料：500円/2hその後30分ごとに150円追加

・○　子育て等に関する相談、援助　○　情報提供、講座の開催

○　木育サポーターの養成

(5)利用状況

平成28年まで市内2ヶ所にあった子育て支援センターの合計利用実績

平成27年度　12,855人、　平成28年度　10,791人

「ことこと」運用開始平成29年4月8日～7月31日までの利用実績14430人

平成29年度の利用見込みは20,000人であるが、実際は大幅に増。

施設の噂等で市内外、県外からの利用も増加しているとのこと。

(6)利用者の評価

・家ではぐずっていいても、「ことこと」にくると泣き止んで遊ぶ。

・「ことことに行くよ」というと、すぐに準備するようになった。

・幼稚園より「ことこと」が好き。

（幼稚園に行かないと「ことこと」には行けないと言うと、素直に行くようになった。）

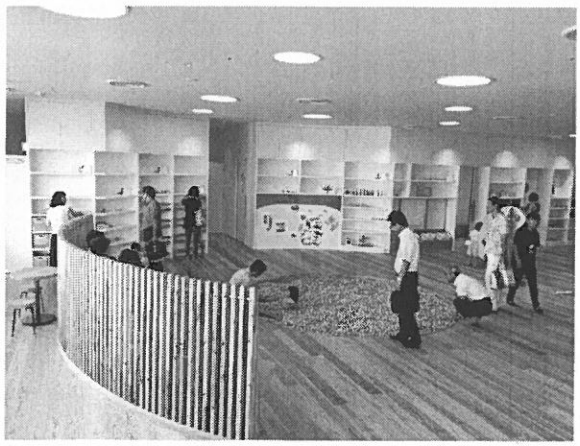
・知り合いが少ない利用者に対する職員からの情報提供、同世代との出会いの機会はありがたい。

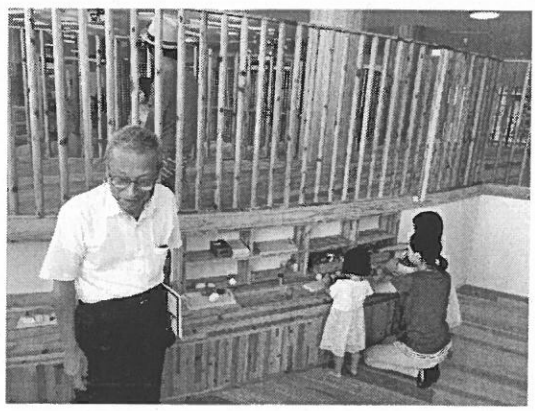
（所感）

“百聞は一見に如かず”のとおり、ネット等の情報ではすばらしい施設と認識していたが、実際に現場を拝見し、詳細な説明を受けてみると、まず施設に入った瞬間から木の匂いが迎えてくれ、たくさんの親子が精神的充実感漂う空気の中で楽しそうに過

ごしていた。特に子どもたちは積み木や体験ゲームなど木のおもちゃに夢中で、子どもの感性はこういったところからも育っていくように感じた。

日南市の子育て支援センターが「日本一の木育広場」に拘った理由は、ただ飫肥杉の産地というだけではなく、日南市こども課によるこどもの現状、出生の状況、検診等の状況、待機児童・保育士不足、市に寄せられる養育の相談・通報、アンケートによる子どもの生活実態調査等々、あらゆる角度からの綿密な分析と係る人材と資源をフル活用し、先見の明をもったベストな施設を目指したことだ。また崎田日南市長は、まだ３０代の若い市長ではあるが、「日本の前例は日南が創る」というキャッチコピーのもと、安倍首相が“地方創生の原点はここだ！”と言った油津商店街や１６万トン級のクルーズ船の誘致など他の自治体に先がけて積極的な施策を打ち出している。黒岩こども課長をはじめ、職員の意識も大変前向きな印象を受けた。





② 高千穂町　世界農業遺産、伝統芸能の継承について

平成29年8月23日（水）13：30～17：00

高千穂町議会議長：佐藤節生氏　　議会事務局局長：佐藤英次氏

総合政策室　室長：甲斐宗之氏　　総合政策室主事：田崎友教氏

(内容)

高千穂町は人口12,630人、世帯数5,035世帯、観光客数約162万人（H２７）で、高千穂郷・椎葉山地域の3町2村の総人口も約25000人である。天孫降臨の地として知られており、氏神様や山の神・水源神をはじめ、野山のいたるところに祀られている神仏への祈りを糧に、山の峡に拓かれた狭い田や細長い畑を有効に活かしながら、農村景観の保全を図るとともに、夜神楽をはじめとする高千穂特有の生活文化を大切に受け継いでいる。そうしたことから、平成27年12月15日「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」が世界農業遺産に認定された。認定内容として、本地域は棚田と山腹用水路、林業、焼畑、椎茸栽培、釜炒り茶、畜産といった伝統的な農林業と村落共同体を維持する伝統文化「夜神楽」がその要旨である。

世界農業遺産認定のメインに「神楽」が重要視されており、認定区域内の5町村に87の神楽保存会が存在している。そのうち、高千穂町内では30の保存会があり、関係者（奉仕者）は462名で高千穂町内の男性人口の7.6%相当する。

平成28年度の夜神楽公演の実績は、平成28年11月12日～平成29年2月11日までの19公演開催されている。公演場所は町内の公民館が主で、中には個人宅での公演も実施されている。

本年8月には、町内30の保存会などが参加して、「夜神楽伝承協議会」が発足し、これまでなかった神楽のネットワーク組織が誕生した。この協議会には、神楽保存会のほか、神社の宮司や氏子総代、町公民館連絡協議会の代表、学識経験者が含まれている。今後、神楽の伝承者育成や、イベントへの派遣事業などを進めるとともに、昨年11月に九州5県の10神楽団体で発足した「九州の神楽ネットワーク協議会」と連携しながらユネスコ無形文化遺産への登録申請を目指している。

(感想)

世界農業遺産に認定された高千穂郷・椎葉山地域であるが、認定の背景にあるのは、都市部から見ると条件不利地域が、長い歴史のなかで培われ、育まれてきた人々の連携、協働の意識が、総合的に持続していることにある。伝統文化を大切にし、自然の恩恵に感謝し、地域の和を老若男女が共有してきた。この地域の人々は地理的条件の良し悪しの認識は持ち合わせていない。自然と共に地域に存

在するすべてのものを受け入れ、最大限に活かす地域住民の意識が評価されて、世界農業遺産に結びついたものと思う。具体的な例の一つに夜通し神楽を舞う人たちに対して、そのすべてに世話をする女性たちがいる。この地域のコミュニティー（結束力）が強いからこそ伝統が受け継がれているものと思った。

ただ、遺産登録に向けての事務的手続きについては、大変なご苦労もされている。５つの町村がまとまることにも確執の少ない地域の連携があったからこそだと思う。

③　高千穂町　地域資源を活かした取組について（秋元集落）

平成 29 年 8 月 24 日（木）9：00～11：00

民宿まろうど、高千穂ムラたび：飯干淳志氏

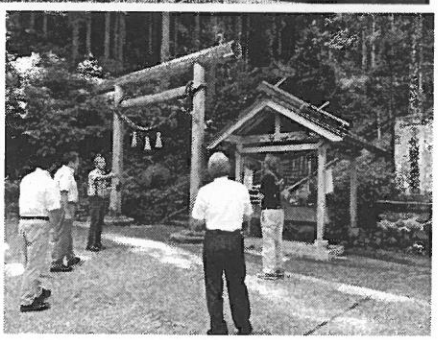
（内容）

高千穂町中心部から山間地に向けて離合も厳しい道を約 40 分走ると秋元集落にたどり着く。秋元集落は、40 戸約 100 人の集落で、そのほとんどが斜面に位置し、小さな水田が多く、枚数にして 100 枚以上ある。そういった地域でグリーンツーリズムの民泊を経営しながらどぶろく特区によるどぶろくと甘酒を製造し、売り上げの上昇に伴い地域米をＪＡより 2 割程度高く購入し、耕作放棄地の拡大にストップをかけた。地域活性化の先頭に立つ「株式会社高千穂ムラたび」代表の飯干淳志氏が高千穂町役場職員時代から思い描いていた、地域資源を活かした地域活性化の成功事例である。（54 歳で退職し、現在 9 年目）

どぶろくと「飲む点滴」と言われる甘酒の製造は、民宿敷地内の小さな工場で造られており、月に 5 万本、年商約 1 億円を売り上げる。従業員は、集落外から 20 代、３０代の若者を１２名雇用している。

ここで製造されている甘酒「ちほまろ」は米こうじの甘酒に日と手間かけ、植

物性乳酸菌で発酵。優しい甘酸っぱさとすっきりとした味わい。無添加だが常温保存で８ヶ月。折からの甘酒ブームに乗って、美容・健康志向の消費者の心をつかんだ。原料の米は、集落内の棚田で栽培した「ヒノヒカリ」を農家から買い取っているが、契約面積３ヘクタールでは将来的にも足らず、集落外へも手を伸ばしたいが、いろいろと障害があり苦労しているとのことである。

（感想）

とにかく、この秋元集落の地理的条件の悪さはこの上ない。普通に生活するにも大変に思う集落で飯干ファミリーは民宿を経営し、どぶろく（甘酒）の製造工場を持つ。さらに奥に進んだ山間にあるパワースポットの秋元神社と併せて年間３万人以上の人が訪れることに驚愕した。高千穂という知名度もあるが、結論から言うと人の考え（信念）と行動力、そして地域（集落）の危機感からなる結束力ではないかと思う。飯干淳志氏とは、９年前に九州ツーリズム大学（湯布院で開催、ワークショップ等）で知り合い、当時は高千穂町の職員でとても感じの良い人だった。それから９年間で今の秋元集落を創りあげられた。“夢が目標に”そして、地域資源のすべてをストーリーで結びつけ、経済効果を平行に地域の人々に活力をもたらせたことは、まさに“オーライ日本”大賞に相応しいことを視察により実感した。